神島

大城 立裕

日本放送出版協会

大城立裕（おおしろ・たつひろ）

1925(大正14)年　沖縄県中頭郡中城村で生まれる。
1967(昭和42)年　第57回芥川賞を『カクテル・パーティ』で受賞。沖縄初の芥川賞作家となる。『小説・琉球処分』『現地からの報告・沖縄』『ぱなりぬすま幻想』『恩讐の日本』『風の御主前-小説・岩崎卓爾伝』など著書多数。
現　在　沖縄県立沖縄史料編集所長。

検印廃止

神島

昭和四十九年七月二十五日　第一刷

著者　大城立裕
発行者　浅沼博
印刷　交通印刷
製本　石津製本
発行所　日本放送出版協会
郵便番号一五〇
東京都渋谷区宇田川町四一一一

（落丁本・乱丁本はお取替いたします）

©1974 Tatsuhiro Ōshiro

目次

神島……7
弁財天堂……141
骨がやってきた……163
筏……259

カバー装幀　米谷誠一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

神

島

神島

一

島でただ一本の舗装道路が、部落から山間を縫って三キロ先のナイキ基地につづいているが、その道路の入口に立っては、基地施設は山にかくれてみえない。それが、普天間家の座敷にすわっていると、よくみえた。山峡の稜線の交わった底に、基地施設だけがもっている広い芝生が遠く美しくみえた。

「しいて、これ見よがしに、ここから見えてくれなくてもよさそうなものだが」

普天間全秀は、言葉の調子だけで笑った。五分刈りの頭はすっかり白髪で、眉さえもなかば白く、頬も田港真行の記憶よりは細くなっている。全体的にまだ健康そうではあるが、やはり苦労したのだな、と田港はさぐる気もちで、

「基地ができるとき、反対運動はあったのですか」

「いや、なかった。あっさりと出来ました」
「先生はそのときは……」
誰かひとりぐらいは、反対とはいわぬまでも、島をあげての風潮についていけないという者が、ひとりぐらいいてもよさそうなものだ、と思う。そして、そのひとりとは、あの戦争中に、島の国民学校長として一徹な国民教育の実践者であった普天間全秀であってもよいと思う……。
「二十三年ぶりですか」全秀は、ほかのことをいった。「どうですか、田港君。二十三年ぶりの沖縄は」
逆の質問であった。そうしていいながらさしだすビールをグラスで受けて、田港は、
「おどろくばかりです。弟に笑われてばかりいます」
まったく、那覇の港におりたってから一週間、おどろき通し、笑われ通しだったな、と思う。
家をはなれたのは昭和十九年九月。神島国民学校の疎開学童を引率して、九州へ渡った。そのころ、くろぐろとそびえたつ多くの福木にかこまれていた由緒ある生家は、もうない。三百坪からあった屋敷は都市計画で削られ、屋根瓦に苔さえ生じていた古い家のかわりに、派手なペンキ塗りのブロック造の家が建っていた。自分の家とも思えない、というと弟は、あたり前だ、おれの造った家だもの、二十三年も放ったらかした長男には、なつかしむ権利もあるまい、と笑った。そういえばそうだった。別に故郷を捨てたというわけでもないが、疎開先で土地の娘を妻にしたあと、そのまま居ついてしまった。財産の処分も、弟にまかせてきた。はやく神島へ渡りたいというと、弟は、神島だって、ナイキ基地かなにか出来てしまって、もう兄さんのいたころの神島ではなかろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

よ、とまた笑った。
「形もたしかに変りましたな……」
全秀は、遠い山をながめる眼を動かさずに、「しかし、人のほうがなお変った」
「たいへんな苦労があったそうですね」
どう変ったのか、と問いたい気持をおさえた。
島へ渡ったら島の集団自決の話をよく聞いてみたいのだ、と弟にいうと、さあ、島の人は戦争のことをそんなにおぼえているかな、というより話したがらないのではないかと、これはあまり笑わずに言った。食料品、雑貨の輸入をやっている弟は、商売にかまけて戦争のことなど忘れてしまった、といってあまり話さない。ほんとうに忘れてしまったのか、忘れたいと願っているだけなのか、田港にはよく分らない。神島の人たちはどうなのであろうと、そのときからすこし気になりだした。すると、自分のことも神島ではどう思われているのか、あらためて気になった。
疎開するまで四年間、この神島の国民学校につとめた。疎開で引率して行った学童は、十名である。島を出る日、小学校の職員生徒あわせて二百名を、校長がひきつれて見送りにきた。上級生は竹槍訓練の時間をさいて、竹槍をもったままであった。島は立派に守ってみせるからな、その十名をよろしく、と普天間校長は甲板にあがった田港に言った。十名から欠けることなく無事に送り返したのはよかったが、自分は居残り、他校の教員にあずけてしまったのは、いまもって気がひける。
「なに、そんなことは、みんな忘れていますよ。先生も律儀ですな」

といったのは、校長の息子の全一であった。けさ、島へ渡る船のなかで、偶然会った。戦前は臭い小さな木造船だったのが、立派な鉄船にかわって、一時間ほど小ゆるぎもしないことにもおどろいたが、普天間全一の変りかたにもおどろいた。たしか、中学二年くらいで肋膜炎で学校をやめ、それからぶらぶらして兵隊にもとられず、竹槍訓練もうけず、いつも青い顔をしていた。父全秀からの手紙で元気だとは知っていたが、本人に会ってみて、生き残ったのだなと、あらためて思った。村の助役をしているということを、自分で誇らしげに言った。わるい時代に生れたものです、上の学校にもいけず、などと言ったが、それは口先だけで、基地収入のおかげで鉄船を村で経営することができた、などと語る言葉のほうが本音らしかった。

「戦争で、それは苦労はしましたですがね。いつまでも、そればかりにこだわってもおれないでしょうが」

と全一が言ったとき、田港はなかば救われる思いをしながら、島で集団自決の話を聞くことは、案外難しいことかも知れない、と思った。

神島の集団自決は、沖縄戦記に名高い。

一九四五年三月、沖縄近海にやってきた米軍は、まず神島に上陸した。島には守備隊として一箇中隊の三百余人と、非戦闘員で組織した防衛隊七十人、朝鮮人軍夫約二千人がいた。その中隊長である黒木中尉から米軍上陸の一日前に村長あてに命令が届いた。非戦闘員は赤堂原（あかどうばる）に集結せよ、という。赤堂原は部落の南の山にかくれて見えない窪地である。その頃、わずかの甘藷や水芋が植えられていたが、食糧不足の時代というのに多くは萱に蔽われていた。三方は雑木林にかこまれ、他

の一方が丘陵を背にした墓地になっている。昼間でも一人では心細い場所だが、多くの島民たちがそこに救いを求めて集結した。そこは軍の壕に近い。赤堂原の片隅に小川が流れていて、壕のなかの兵隊たちが毎日そこへ水を汲みに出て来る。そこに集結することは、軍が島民の生命の安全を保護してくれるということであろうと、彼等は思いこんだ。ほかの場所に壕を掘ってはいった人たちも、かなり集まってきた。午後四時、窪地であるから日の翳りは早い。集結はしたが宿営の用意はなかった。鴉がときたま大きな羽音をたてて飛び交うのを見上げて、人々は不安と期待の表情を寄せあった。そこへ軍から宮口という軍曹が来て村長をつれて行き、村長はしばらくすると戻ってきて命令を伝えた。「軍は最後の一兵まで島を死守する覚悟でいる。その食糧を確保するために島民は自決せよ」という。そして、一世帯に一箇の手榴弾が配られた。人々の間に動揺はおこったが、まもなく誰かが手榴弾の信管を抜き、それを胸に抱いて周辺にいた数人が一緒に砕け散ると、それが連鎖反応をよんで、そこここで爆発はおこった。不発で成功しない者は剃刀で自分の咽喉を切り、あるいは鍬で子の頭を叩き割った者もいた。そして日の暮れがたまでには三百二十九人が自決をし、自決をのがれて部落に戻ったわずかの者のなかには、翌朝小川の下流にその血を認めた者もいた。壕にひそんでいた友軍部隊は、沖縄戦終結後一か月も抵抗をつづけ、七月中旬にいたって黒木中尉以下の生き残った将兵全員が投降した。

神島の戦闘は、沖縄戦全体からみれば、一部分にしかすぎないから、悲惨だった沖縄戦の予言的幕明きとして有名ではあるが、記録として多くはない。一冊の戦記本で、序章として簡素に記されているだけである。島の人たちの細かい心理などは読みとれない。それを知りたいと田港は思った。

まだ戦記本などいくつも出なかった十数年前、黒木大尉はひとり脱出したという説が伝わって、田港はショックを受けた。その後、二、三の記録をみて、そういうことではなかったということを知った。そのほかに、村長と国民学校の校長は軍の手先になって島民たちに自決をすすめ、自分たちは生き残った、という話も伝わった。この話は、十年ほど前、本土のいくつかの新聞社から集団で沖縄現地を視察した記者のひとりから、じかに聞いたのである。そのとき田港は、普天間校長と知りあいだということを、その記者にはだまっていた。なんとなく、話が広く深くなっていくことが怖かったのである。ただ、そのときから、一度は真相をさぐってみたいと、思うようになった。真相といっても、歴史をくつがえすとか、そういう大それたことでなく、短章の記録ではつくしえない、島民たちの心のうごき、ひだを知りたいということである。それを知らずに紋切り型の記録を納得してしまうのは、怖い気がした。

その気になってから、あらためて普天間全秀に手紙をだしてみたが、返事には、家族のうち老妻が死んだことと、息子全一が結婚して孫を生んだことに加えて、疎開から帰った田港の教え子たちは、多くが本島の高校へ行って、神島へは帰ってこない、などということが、簡単に書かれているだけであった。心のひだなど、知るよしもなかった。

「あのころの村長は、戦後亡くなりましてね。いまの村長は、ご存じですかな、知名徳永といって、ぼくより五つぐらい先輩ですが」

全一は、船のなかで、そういう話をした。そこには、戦争の疵などというものは、ひとかけらもなかった。そういう普天間全一からは、その父全秀の心事については、さぐりようもなかった。

「こんどの慰霊祭に田港先生が列席なさるというので、みんな喜んでいますよ。歓迎会があると思います。うちの親父も喜んで出席するはずですよ」

などとも全一は言った。

神島小中学校と田港のつとめる小学校とが姉妹校の縁を結んだのは、四年前のことであるが、島の戦没者慰霊祭に招待をうけたのははじめてである。いずれも疎開の因縁からであり、いまなお田港がその絆になっていることに、田港は多小面映ゆいものを感じる。沖縄が戦後島をあげて苦労しているということを思いあわせると、その絆になりえたことが、せめてもの償いになっているような気もするし、またそれだけで自足しているような自分を恥じる気持もある。そこへ、普天間全一のような、割り切った明るさをもってこられると、なにか荷をおろすような気にもなる。

お父さんは戦後はずっと隠居ですか、と問うてみると、全一が答えるには、

「生き残っているのも余分なのだから、と言いましてね。あのころは校長としても若かったのですから、戦後だって、働こうと思えば働けたのでしょうが、まずぼくも働けるようになったし、百姓をしながら食うだけは心配がありませんでしたから」

ということであった。

このように、かれらがすっかり生れかわったような気持で、戦後の生活をはじめたのであれば、基地ができても精神的にどうこういうこともないのかもしれない。ただ田港の記憶にある普天間全秀と、このアメリカ軍基地との共存生活というものとが、結びつかないだけであった。

「本島へは、ときどき出られますか」

田港は、普天間全秀に問うてみた。
遠いナイキ基地の白い建物が、夕焼けに映えている。
「やっとこのごろね、年に一度ぐらい」
「それは。……老いて、かえって出歩かれるようになったのですか」
田港は、月並みな世辞をつくって言った。しかし、戦後十数年も島を出なかったということは、考えてみればただごとではない。ひとなみに観光しようという気もおこらなかったのか。——
田港は、性急に普天間全秀の心境を分析することを、断念した。老いた元校長の表情はゆるやかで、むしろ二十年前にくらべると人を容れる表情になっているようであったが、あからさまに拒否しないだけで、いきなり踏みこもうとすれば、ひそかに裏へまわって逃げる様子があった。
全一は、田港を船から宿へ案内し、せかすようにその足で自宅へひっぱってきて父へ紹介すると、そのままた出かけていった。今晩さっそく田港先生の歓迎会をしましょう、などといっていたから、たぶんその連絡でもしに行ったにちがいない。田港は暇を乞うて起った。全秀はしいてひきとめもせず、あとで私も行きますと、玄関まで送って出た。
そのとき田港は、宮口朋子という娘をはじめて見た。田港がガラス戸をあけると、そとに朋子は立っていた。田港にすこしおどろいた様子であったが、無表情で会釈をすると、すぐ全秀へ、
「このかたが、先生にお会いしたいそうです」
と、すこし甲高い澄んだ声でいった。その背後に、若い男が立っていた。
「与那城と申します」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.